

# 西藏文佛說大無量壽經和譯（承前）

寺本婉雅譯

## 第三章

(1) 阿難陀よ、又かの無量壽如來應供正等覺者の菩提樹は大さ千六百由旬那あり。枝葉華瓣は八百由旬那まで垂れ、根本の周圍は高さ五百由旬那あり。

常に葉を附着し、常に花を附着し、常に果を附着し、さまゝの色と數百千の色あり。雜葉、雜華、雜果、種々の嚴飾に依て莊嚴せられ、月の如く照らす寶珠を以て總て朗らかに、因陀羅の持する寶珠を以て完全に飾り、如意寶珠を以て滿たし、海の最上寶珠を以て極めて完全に飾り、色は天業を超過し、金線を垂れ、麗はしき頸珠、寶纓、飾環、頸飾、足飾、赤眞珠の飾環、青眞珠の飾環、獅子口より垂るゝ帶集あり。寶線と一切寶と貝とを以て能く飾り、金網、眞珠網、一切寶網、小鈴網を以て天蓋を張り、海豚魚(鰐)と、吉祥卍字(svastika)と、半月の如き(記號)を以て能く飾り、寶鈴と金と一切寶飾とを以て飾り、有情の思惟の分別智に隨て能く嚴飾せらるゝなり。

(2) 阿難陀よ、若しかの菩提樹が風に搖がざれば其出づる音聲は無量の世界に聞ゆなり。阿難陀よ、そは(即ち)菩提樹の聲があらゆる有情の耳道に響かば、彼等は菩提の究竟に至るまで耳の病を發せざるを知るべきなり。無量、無數、不思議、無等、無比、無計、無稱なるあらゆる有情の眼道にかの菩提樹の現はれば、彼等は菩提の究竟に至るまで眼病を發せざるを知るべきなり。阿難陀よ、あらゆる有情は彼菩提樹の香を感じば、彼等は亦菩提の究竟に至るまで決して鼻病を發せざるを知るべきなり。あらゆる有情は彼の菩提樹の果肉を味はり、彼等は亦菩提の究竟に至るまで決して舌病を發せざるを知るべきなり。かの菩提樹の光りにてあらゆる有情を覆はり、彼等は亦菩提の究竟に至るまで決して身中に病を發せざるを知るべきなり。阿難陀よ、あらゆる有情はかの菩提樹を法性(の如く)眞實に思惟せば、彼等は亦今より以後菩提の究竟に至るまで決して心を動かされざるを知るべきなり。彼等一切有情はかの菩提樹を見るや否無上正等覺より退轉せざるべし。かの無量壽如來の宿願の加被力と、昔の勝者に對して集めし所行と、昔の誓願と、能滿の行と、能修習と、不損と、缺陷なき」とに由て是の如く、聲の隨行と、隨順と、無生法忍(*Mi-Skyes-Bahi* (*Chos-La bZod-pa*))の三種忍を得るなり。

(3) 阿難陀よ、かの佛國に已に生れ、今生れ、當に生れんとする彼等一切のあらゆる菩薩は、一生に依て繫がり(一生補生)て、無上清淨圓滿の菩提を現かに成就せる覺者(*Rgya Ba*)となるべし、(但し)

誓願の力を除く。彼等の菩薩は獅子の大音を咆吼し、大鎧を被り、一切有情を全く苦惱より征伏（退轉）せしむべく勵むのみ。

(4) 阿難陀よ、かの佛國に住する彼等一切聲聞は全て一尋の光（を有す）。彼等の住するあらゆる菩薩は全て百千俱胝由旬那の光（を有す）。あらゆる菩薩は光を以て彼世界を常に永續して絶へず周圍を照らし、覆ふところの彼ニ（菩薩）を除くなり。

爾時世尊に長老阿難陀は是の如く白して曰く。世尊よ、かの二大菩薩の名は何と名けらるゝや。

世尊は告げ給はく、阿難陀よ、彼のニ（菩薩）中の一名は觀自在大菩薩と名けられ、一名は大勢至と名けらるなり。阿難陀よ、かの二（菩薩）はこの佛國より死去し了りて彼佛國に生れたるなり。

(5) 阿難陀よ、かの佛國に生れたる彼等一切菩薩は三十二大人相を具し、身は全て圓滿にして、靜慮、神通に熟達し、智慧の分別に熟達し、利根、制根、普知根を具し、卑劣ならず、根動搖せず、忍を得て無邊無限の功德のみ（を有す）。

(6) 阿難陀よ、かの佛國に生れたる彼等一切のあらゆる菩薩は佛を見ること（より離れず、菩提の究竟に至るまで顛倒に墮せざる法を有するのみ。彼等の一切は是れより近侍し、決して前生を記念せざるべくならざるべし。されど前生を記念すべし。譬ば凡そ佛世尊の世間に出現し給ふが如き、劫波の動搖に住せんとする昔の諸發願を除くなり。

(7) 阿難陀よ、かの佛國に生れたる彼等一切の菩薩は、一朝に從ひて他の諸世界に行き、數俱胝尼由他の佛世尊を恭敬す。彼等は是の如き種類の華、燒香、燈薰香、鬘、塗香と、抹香(以下原本二九八右)、衣、傘、幢、幡、樂器、音曲、音樂の音聲等を以て供せんと思惟せば、應に心を發起し、應にそれらの諸欲(願)を以て心を發起するや、直ちに佛の威力を以て是の如き種々の供養の諸具は手中より出現せん、彼等は華乃至音樂の音聲に至るまで、それらを以て彼諸佛世尊を供養するが故に、又無量無數の多諸善根を發起して積むるなり。若し又是の如き種々の華束を手中より出現せしめんと欲せば、彼等は發心するや否、異色ある天華と異香と數香ある諸華束を手中より出現し、彼等は是の如き種々の華束を彼等の佛世尊の上に散布し、現かに散じ、能く散すなり。華束を散する其等一切より、(その)中の云何なる小なるものも、そは亦虛空に於て殆ど十由旬那の華蓋となりて、後ち他のものを散布するまでは、最初のものは地に落ちざるなり。若し其中に華束を散らさば虛空に於て亦殆ど二十由旬那の蓋となるもあり。殆ど亦三十由旬那、四十由旬那なるもあり。虛空に於て華束は亦殆ど百千由旬那の量に至るまでの蓋となるもあり。そこにあるやる歡喜と、最上の廣大歡喜を生じ、廣大なる歡喜心を得し了りて、無數無量の善根を生じ、數百千俱胝尼由他の佛を恭敬し、一朝に再び還りて極樂世界に住す。彼の無量壽如來世尊の宿願の攝受(Byin-Gys.)に由て全く攝受せられ、宿(世)聞法の恵みと、昔の勝者(所)に善根を發起し、宿願に融合して全く圓滿し、不損と善分別と

善修習とに由て發願を成就す。

(8) 阿難陀よ、彼の佛國に生ずる彼一切菩薩は、一切智性を有する法話を宣説し、彼の佛の國に於けるあらゆる有情は、又「總てを(貪)持す想」も生せず。彼等一切は彼佛國を全く愛し、遊行するに喜厭も生せず、又進むとき注意を要するなく、進むに付ての注意と共になし。是の如く(彼等は)物を總て持し、住する心と、是の如き諸念も尙あることなし、阿難陀よ、かの樂有世界に生ずる彼等一切の菩薩は、他の想もなく、自の想もなく、我の想もなく、鬭諍もなく、諍論もなく、不相應もなく、不同の念もなし。彼等は一切有情に等心と、利心と、慈心と、柔心と、妙心と、善心と、淨心と、堅心と、無障心と、無動心と、無濁心と、般若波羅蜜多行を行する心と、心の相續、幻影の自性とに心を能く住す。慧は大海に等しく、心は妙高山に同じく多くの功德を積集し、覺分を如實に進みて遍く遊戯し、佛に如實に進みて現かに勤修す。

(9) 肉眼を完全に開き、天眼を現かに成就し、智眼の證を理解し、法眼の彼岸に達し、佛眼を成就し、説明し、教へを廣大清淨に教へ、無貪の智を現かに成就し、三界平等性に於て現かに勤修し、調伏の心、寂靜の心、一切法不縁(不可得)を具し、集(因)の實語に熟達し、法の實語を具し、明了と不明了とに熟達し、理趣と、非理趣の所住に熟達し、世俗話を見ずして住し、出世間の諸話に由りて心藏(sNīp-po)を證し、一切法を全く求むることに熟練し、一切法の自性寂靜の智に由て住し、無

縁の行境の無所得にして、無取、無念、無蘊、無取に由つて善く解脱し、煩惱なく、諸神通の無窮に住し、無根に住し、貪心なく、怯劣なく、諸深法を現かに勤修し、懈怠なく、難解の佛智に入りて、高勝に、一趣道を得し、疑惑なく、怖畏を渡り、他のものを注意せざる智ありて、増上慢なきなり。(10)、(一)智に由りて現かに最勝なること妙高山に等しく、(二)動搖なき覺は海に似たり。(三)慧光と、白くして純白淨善の心と、鎔解せる黃金色の如く輝き、光を發する功德の最上は日月光に超過す。

(四)一切有情の淨善と、不善の忍耐と地に等し。(五)煩惱の垢を洗流すること水に似たり。(六)一切法に慢心を起すものと、煩惱とを焼くが故に火王に等し。(七)一切世間に無著なるが故に、風に似たり。(八)一切法を眞實に決定し、一切に無所得の故に虚空に等し。(九)一切世間に汚染せられざるが故に蓮華に似たり。(十)法と非法とを現かに宣説することは、時に應する大雷に等し。(十一)法水の雨を降らすが故に大雨に似たり。(十二)大聚の威光に壓せらるゝが故に毘濕奴に等し。(十三)心を尤も最上に調伏するが故に大象に似たり。(十四)能く調伏するが故に、善良の馬に等し。(十五)堪能と不畏とに由て恐怖なきが故に、獸類の王なる獅子に似たり。(十六)一切有情を遍く守るが故に榕樹 (*Nyagroda*) 王に等し。(十七)一切の反対者に依て動かされざるが故に山王蘇迷山に似たり。(十八)無量の慈愍を修習するが故に虚空に等し。(十九)一切善法の支配者たるべく前進するが故に大梵に似たり。(二十)住するに積集なきが故に鳥に似たり。(廿)一切の反対を全く威伏するが故に鳥王なる金翅鳥に似たり。(廿一)出現すること難きが故に

優曇華の花に等し。<sup>(三)</sup> 吼ゆる(突進する)象を善く馴らすが故に、全く動くことなく、鉢根なく、能く制(禦)する熟達者なり。

(11) 忍辱と決定とを有し、他の完全(幸福)を願ふが故に嫉妬なく、諸法話に畏れなく、總て法を尋求するが故に飽くとなく、戒に由つて瑠璃の如く、聞に由て寶藏(Rin-Po chechi)に等し。大法鼓音に由つて妙音あり。大法鼓を擊ち、大法螺を吹き、大法幢を建て、大法幡を持し、大法炬を耀かし、慧を以て完全に見て、癡なく、瞋なく、過を伏し、清淨、垢なく、貪なく、眞の分與に喜びを與へ、布施に手を擴げ、法と財との誠との分與を喜び、布施に吝貪なく、混合なく、意に畏れなく、慾なく、堅固勇猛、龜恵智を有し、執心を持し、信解を有し、苦痛生は絶えてなく、眞に神通を得し、交際を平和に、利益を行ひ、世界の明かならざるを導き、歡喜の貪慾と、隨慾と、忿怒とを離れ、清淨にして憂を離れ、垢なく、三垢を離れ、神通に由つて遊び、因力を有し、願力を有し、卑賤ならず、謐偽なく、百千俱胝尼由他の諸覺者に善根を發起し、我慢の苦惱を脱し、貪慾と、瞋恚と、愚癡とを離れ、清淨に善を信解し、尊き勝者に由つて歎せられ、世界に熟達せり。淨智を如實に成就し、勝者に讚せられ、歡喜心を具し、勇氣、堅忍、無等、無邊、無比、無塵、積集、廣大にして主長となり、眞理を説き、覺を具し、念を具し、慧を具し、證を具し、慧の兵仗を有し、功德を有し、恨と、垢と、恚とを離れ、常に法を勵み、一切法を聞くこと海の如くなれるもの而已。

(12) 阿難陀よ、略せば、彼覺者の國の諸菩薩は、是の如きのみ、若し廣説せば如來の壽量は千百俱胝尼由他劫波も住して説くといへども、彼等善人の功德の際限を説く能はざるが故に、尙如來の無畏は相續して斷絶せざるべし。何故と云はゞ、阿難陀よ、是の如し、彼等菩薩の諸功德と、如來の無上なる智勇とは、その兩つながら亦不可思議にして、無比なればなり。

(13) 阿難陀よ、起てよ、西方に面して華を散し合掌せよ。彼處に世尊無量光如來、應供正等覺者は塵なく、清淨に住し、生活を處理しつゝ、あらゆる法を説き給へる彼方向に敬禮せよ。彼の名號は是れ亦障礙なく、十方に稱讚せられ（以下原本、又各々の方に於て恒河沙量の覺者世尊は、欲を有せざる言語、執着を有せざる言語を一度ならず、讚稱し、讚歎して光榮を説き給ふ。是の如く告げ給ひしき、世尊に長老阿難陀は是の如く願へり。世尊よ、我は彼無量光と、彼無量壽の如來應正等覺者と、百千俱胝尼由陀の覺者に於て善根を競へる彼等大菩薩を拜見せんことを願ふ。

(14) 長老阿難陀は此語を説きしや否、その時、その瞬間によりて彼如來應供正等覺者の手掌より一光に依て百千俱胝の覺者の國を照らし覆へる是の如き光りを放ち給ふ。その時、百千俱胝の覺者の國に於ける黒山、或は寶山、或は妙高、或は大妙高、目眞隣陀、或は大目眞隣陀（華）、或輪圍、或大輪圍、或は建築、或は柱、或は美麗なる密林、或は庭園、或は不思議殿、天人の云何なるものも、其等一切は、彼無量光如來の光明に由て（照）過し、光耀に由て壓せられたり。譬ば是の如し。或人

が日の昇りたるとき、唯一尋に於てあるとき、彼(第一の)人を見るが如し。その時、是の如し。彼佛の威神と光明とは全く清淨なるが故に、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、伽樓茶、緊那羅、摩訶羅伽、人、非人等は此覺者の國より妙高山王の如く、一切覺者の國より現かに勝れて、一方を光耀に由て壓し、照り輝き、輝きて美麗なる彼無量光如來應供正等覺と、彼菩薩の大衆と、彼比丘衆とを見たり。譬へば是の如し。此大地が一水に變せば、其處には諸樹林もなく、諸山もなく、諸島もなく、草も灌も、藥(草)も、諸森もなく、諸河もなく、泥溝もなく、諸洞窟も見えざるが如し。但し他に於て一大海となりたるを除く。是の如く、彼の佛國に於て明かに成就せる一尋の光ある諸聲聞の身と、百千俱胝の諸菩薩の無量光あるを除きて、他の標相、或は僅少の記號さへもなし。彼世尊無量光如來應供正等覺者は彼聲聞衆と、彼菩薩衆とを光耀に由つて壓し、一切方を明かに普く照らし給ふ。その時、彼極樂世界に於ける一切の菩薩と、聲聞と、僻支佛と、彼等一切の天と人とは此娑婆世界(に於て)釋迦牟尼如來は大比丘衆に圍繞せられて法を説き給へるを(見るなり)。

(15)爾時世尊は、彌勒大菩薩に告げて曰。(以下原文)。彌勒よ、汝は彼佛國の此完全なる功德嚴飾莊嚴と、愛樂の林と、愛樂の園と、愛樂の河と、愛樂の池と、寶蓮華と、水蓮と、白蓮華とに満ち、地上より昇りて究竟天に至るまで、虛空の(一)面に華を散らし、華鬘を以て普く美しく作り、種々美

麗なる寶鬱を以て充滿し、如來所變の種々の群鳥に依て宣說せらるゝを見るや、（彌勒）曰、世尊よ、見たてまつるなり。世尊は告げ給はく。彌勒よ、汝は是れより外の群鳥が佛の一切國に啼くを了解せしめ、それに由て彼諸菩薩は常に佛を憶念すること、不離ならしむるを見るや否。言く、世尊よ、見たてまつるなり。世尊は告げ給はく。彌勒よ、汝は此佛國に於て是等有情は百千由旬那の不思議殿に住し、空中を無碍に（遊）行する彼等を見るや。言く、世尊よ、見たてまつるなり。世尊は告げ給はく、彌勒よ、こは云何に思惟するや。諸の他化自在天と、樂有世界に生れたる諸人とに差別の所作ありや。言く、世尊よ、我は尙一の差別をも如實に隨見せざるなり（以下原文）。彼樂有世界の諸人は大神通を有するものゝみなり。世尊は告げ給はく、彌勒よ、汝は彼樂有世界に於て、或者は諸大蓮華の胎中に住するを見るや否。言く、世尊よ、是の如し。譬ば三十三（天）と、夜魔の諸天、五十由旬那、或は百由旬那、或は五百由旬那の諸不思議殿に入りて、跳戯し、戯樂を行ふ如く、世尊よ、我は彼の樂有世界の或人は大蓮華の胎中に住するを見たてまつる。

(16)世尊よ、彼處に化生する諸有情は諸蓮華中に結跏趺坐して生ずるものあり。世尊よ、或者は蓮華の胎中に住し、或者は蓮華上に結跏趺坐し化生す。その因は何ぞや。緣は何ぞや。世尊曰、彌勒よ、あらゆる菩薩は他の諸佛の國に住して疑に墮する心を以て樂有世界に生せんが爲めに、諸善根を起す、彼等は彼處の胎中に生す。あらゆる疑もなく、二心（疑惑）もなくして樂有世界に生せんが爲め

に、諸善根を起せば、諸佛世尊の無貪智を信じて、信を勝解する彼等は、諸蓮華中に結跏趺坐して化生するなり。彌勒よ、他の諸佛の國に住する大菩薩は無量光如來應供正等覺者を拜見し（以下原文）、敬禮し、恭敬すべく心を起し、疑を起さるが故に、佛の無貪智に疑惑なく、又自己の善根を積集する彼等（大菩薩）は結跏趺坐して化生すべし。例せば是の如し。菩薩は生れて長く経過せざるに他のものと同じく、須臾の間に是の如き身相となるが如し。彌勒よ、慧の差別と、慧の次第と、是の如くして疑に墮する想を意中に作すことに由て、斯く五百歳の間佛を見ることより失墮し、菩薩を見ること、法を聞くこと、法の話と善の行と、一切善の完全より全く損（害）すること、慧を減ずることを見よ。

(17) 彌勒よ、譬へば是の如し。王冠を以て灌頂せられたる刹帝利族の王には、一切の金と瑠璃との牢獄を以て嵌し、縉と華鬘と清淨なる絹飾聚、雜色の天蓋を掛け、更紗を擴げ、種々の花瓣を散し、豊富なる香を薰し、宮殿と、夏殿と、窓牖と、欄楯と、門戸（下馬所）と、一切種々の寶宇（圓形屋根）を以て飾り、黃金と寶との小鈴網を以て張り、四隅を組重ね、四柱を立て、四門を開き、四階等あり。彼王子は或罪の爲めに彼牢獄に投せられ、閻浮河の金繩を以て彼を繫縛せんに、彼處には彼の坐を設けて坐（具）を擴げ、綿（一字不<sup>カ</sup>明花？）を有するものと（以下原文）、綿牀を延べ、羯隣伽國<sup>カリンガ</sup>の被覆を延べ、その上に縉を延べ、左右二方に赤（色）枕を置き、美しき視へに於て美麗なる其處に彼は坐するに適

し、眠るに適す。彼の多くの種々の清淨功德の飲食を設備せんに、彌勒よ、こは云何に思惟するや。彼王子の全て行ふところは廣大なるや否。言く、世尊よ、廣大なり。世尊は告げ給はく、彌勒よ、此は云何に思惟するや。彼はその味を嘗めなすや、嚙下するや、彼は歡喜を得るや否。言く、世尊よ、そは然らず、あらゆる過失の爲めに、王にその牢獄に投せられ、それより脱せんことを求め、貴族中の貴族の青年と、大臣と、王妃の侍者と長者と居士と國王との何人にも、その牢獄より全く脱せしめんことを求むなり。世尊よ、彼王子は、その牢獄中にては快樂なし、王に依て許されざる間は免出すべからず。

(18) 世尊は告げ給はく。彌勒よ、是の如く、あらゆる菩薩は疑に墮するが故に、善根を起し、佛の無等智と、等智を疑ふ(と雖も)、彼等は彼佛の名號を聞きて、かの唯信心に由て彼樂有世界に生ずるものは、亦猪蓮華中に結跏趺坐して化生するにあらざれども、諸蓮華の胎中に住を受くるなり。彼等は彼處に在て庭園と不思議殿との想ひに住し、大便なく、小便なく、睡涕なく、げに意と不想應のものは發生せざれども(以下原文)、五百歳の間佛を見奉ること、法を聞くこと、菩薩を見ること、法話を分別すること、一切の善法を修することを離るなり。彼等は彼等に於て能く歡ばず、満足を得ざれども、宿世の罪を盡し己りて、彼等は蓮華の諸胎より發生す。彼等は彼處より發生すといへども、上或は下、或は側に發生するかを知らざるなり。彌勒よ、是の如く、五百歳の間、百千俱胝尼

由他の諸佛を恭敬し、無數、無比、無量の諸善根を發起し、佛の無量法を全く取持せらるとも、尙彼等一切は疑の罪に由て成せざるを見るべし。彌勒よ、疑に由て菩薩に於ける大壓は云何程になるかを見よ。彌勒よ、かるが故に諸菩薩は疑を全く離れ、菩提に思ひを起して、速かに一切有情を利益し、安樂の力を起す威力を得んが爲めに、彼處に世尊無量光如來、應供正等覺者の住し給ふ樂有世界に生れんが爲めに、諸善根を全て廻向すべきなり。

(19)是の如く告げ給ひしき、世尊に彌勒菩薩は斯く問ふて言く。世尊よ、此佛國より圓成せる菩薩と、他の諸佛國の諸佛世尊の所より(圓成せる菩薩とは)幾許か樂有世界に生すべきや。世尊は告げ給はく、彌勒よ、七十二俱胝尼由他の圓成せる菩薩は此の佛國より樂有世界に生じて、百千俱胝尼由他の諸佛に善根を起すが故に、不退轉を圓成す。是れより小なる諸善根の如き者は何ぞ亦言ふを要せん。(一)難忍如來の所より八十俱胝尼由陀の菩薩は樂有世界に生すべし。(二)東北の隅に於て寶藏(Ratnakara, dkor-*nag*, nByungNas)如來と名くる如來は住し給ひ、そこより九十俱胝の菩薩は樂有世界に生すべし。(三)星光如來の所より二十一俱胝の菩薩は樂有世界に生すべし。(四)無量音如來の所より二十五俱胝菩薩は樂有世界に生すべし。(五)世燈如來の所より六十俱胝菩薩は樂有世界に生すべし。(六)龍威壓如來の所より六十四俱胝菩薩は樂有世界に生すべし。(七)離塵光如來の所より二十五俱胝菩薩は樂有世界に生すべし。(八)獅子如來の所より(以下原文)、萬八千の菩薩は樂有世界に生すべし。(九)吉祥峯如來の所

より八十一俱胝尼由他の菩薩は樂有世界に生すべし。<sup>(十)</sup>人王如來の所より十俱胝尼由他の菩薩は樂有世界に生すべし。<sup>(十一)</sup>力通如來の所より二萬二千の菩薩は樂有世界に生すべし。<sup>(十二)</sup>華幢如來の所より精進を得たる菩薩は同入に由て如實に住し、一八日間に由て九十九百千俱胝尼由他劫波の間を費し、二十五俱胝(菩薩は)樂有世界に生すべし。<sup>(十三)</sup>焰光王如來の所より十二俱胝の菩薩は樂有世界に生すべし。<sup>(十四)</sup>無畏得如來の所より六十九俱胝の菩薩は無量光如來を拜見し、敬禮し、恭敬し、間尋し、間尋せんが爲めに樂有世界に生すべし。彌勒よ、是の如き(法)門に由て、あらゆる如來の所より、彼諸菩薩は樂有世界に彼無量光如來を拜見し、敬禮し、恭敬せんが爲めに往詣する所の彼諸如來の名號を俱胝尼由劫波の間稱讀すといへども、終了を知ること能はざるなり。

(20) 彌勒よ、凡そ無量光如來應供正等學者の名號を聞くところの彼諸有情は云何に多くの利益を善く得るかを見よ。彼等有情は、彼無量光如來に於て、たどひ唯一信心を得たりとも(*Tsa-Na Sans Dad-Pa*)、此法門より信不退の彼等は低劣に勝解せざるべし。彌勒よ、かるが故に汝は勝解せざるべからず、汝は懸念すべし。天と俱に、魔羅と俱に、梵天と俱に、沙門と婆羅門の群生と俱なる世界の前に、この法門を持し、保ち、讀誦し、普く成就し<sup>(了解)</sup>、又他者を廣く清淨に教へ、修習に於て現かに歡喜すべし。彌勒よ、又この法門を唯一日持し、保ち、讀誦し、普く成就し、又直心に依て他者に廣大如實に宣說すべし。たゞひ書典を善く寫して持し、尙彼を教ゆる想を發起すべし。凡そ無量の諸衆

生を無上正等覺の菩提より退轉せざらしめんを要し、彼世尊無量壽如來を拜觀し、自から佛國の特に勝れたる圓滿功德の嚴飾莊嚴を全て攝取せんと欲する彼は、この法門を聞んが爲めに、三千大千世界の國土が、火にて遍く充滿せられたるに、（それを）過ぎて、此法門を聞かざるべからず。聞くといへども、動搖に墮せざる相續の直心に依て隨觀せらるべきなり（以下原文）。此法門を持し、普く成就し、保ち、書寫し、修習の爲めに大なる波浪精進を起すべきなり。たゞひ又一稱の間といへども、如實に讚歎すべきなり。三千大千世界の火にて遍く満ちたらんに、それを過ぎ渡るとも、尙一の後悔を有する心をも發せられざるなり。

(21) そは何故に云ふや。彌勒よ、斯く數俱胝尼由他的諸菩薩は、是の如きこの種々廣大なる法門を聽き、無上清淨圓滿の菩提より退轉せざればなり。未來の時に於て正法の全然破壞せらるゝに至るまで、是の如き種々廣大なる法門を一切覺者に稱讚せられ、一切覺者に讚歎せられ、一切覺者に誦せられ、一切智者の大智慧を速かに成就せしむる此諸(法門)が耳道(ほどり)に響く所の彼等有情は獲得を眞に善く得て、諸善根を發起し、昔の勝者に最も多く修せし所行と、佛の加被力とに由て惠まるべし。又聞き已りて歡喜し、殊勝に大歡喜を得し、執持し、保有し、讀誦し、一切を完成し、又他者を廣く如實に教へ、修習を樂しみ、少くとも文字に寫して供養せば、彼等は又多くの功德を生じ（以下原文）、それを計るべく容易ならず。彌勒よ、是の如く我は彼如來の所行を爲し已れり。汝も亦

疑ひなく勵むべし。無著にして無礙なる佛の智を疑ふ勿れ。一切相の最勝を具足する寶の牢獄に入る勿れ。彌勒よ、この法門を滅亡せしめざらんが爲めに悉く大なる附屬を爲すべし。佛の法門を消滅せしめざらんが爲めに精進せよ。如來の命を動搖せしむる勿れ、げに長久の迫害と、不利と、不安と、苦惱と、顛倒とに墮する勿れ。

(22) 爾時世尊はこの諸偈を告げ給へり。

(一) 諸福徳を修せざるものは、

是の如き此等を聞くを得ず、

凡て勇猛を成就したる、

彼等はこの説を聞き得べし。

(二) 或ものは世界光作の主、

正等覺者を拜見し、

謙敬を以て法を聞く、

彼等は最上の喜びを得べし。

(三) 諸の邪と下劣と卑怯との見を以ては、

佛の法に於て信心を得ること能はず、

凡て昔の佛を供養せし、

彼等は世界主の行 (spyad) に於て學修す。

(以下原文  
三〇七右文。○)

(四) 謐ば生れながらの盲人が闇窟中に於て、

道さへも知らず、(況哉)何をか示し能ふべき、  
是の如く、一切聲聞は佛の智を悟らず、  
何況哉他の有情に於てをや。

(五) 佛に由つて(のみ)は佛の功德を知る、

天、龍、阿修羅、夜叉、聲聞は非なり、  
佛の智の能く説明せらるゝも、

是亦獨覺者の(知るべき)道にあらず。

(六) 若し一切有情は安樂に逝き、

清淨智(を得て)、最上の義に達せる、

彼等は劫波、若は(それより)久しき間だ、

尙一佛の功德を稱讚するとも。

(七) 彼等は實に滅度に至るべし、

されど尙數俱胝劫波の間稱讀するとも

佛の智量を獲得すべからず、

勝者の智の希有なることは是の如し。

(八) 是の故に賢者は知(明)の自性なし、

若し我の語を信じて

勝者の智聚を證知し、

佛自からは(一切)知者なりと云ふ(説話を)宣説す

(九) 人身を得ること希れなり、

佛の出現も希れなり、

信と智とは長久に得べし、

この故に義(利)を得んが爲めに精進を生ずべし。

(十) 若し是の如き最勝の法を聞き已りて、

善逝を憶念、歡喜を得すべし、

若し佛の菩提に勝解を生ずる、

彼等は過去の時に於て我と友たりき。

(23) 此法門を説き給ひしどき、十二俱胝の有情は諸法に於て、法眼は塵を離れ、無垢なる清淨なり。二十四俱胝(有情)は不還果を得し、八百比丘は取なきが故に、諸漏より心は全て解脱し、二十五俱胝の菩薩は無生法忍(*Mi-Skye-Bahi*)を得し、四十百千俱胝尼由他の天と人の群生は、未だ曾て生ぜざりし無上清淨圓滿の菩提に心を發起して、世尊無量壽如來を拜見し、敬禮し、恭敬せんが爲めに樂有(世界)に生れ、諸善根を悉く廻向 (*sio-Ba*) すべきなり。

又彼等一切は彼處に生れ已りて (*Skye-Nas*)、遂に菩薩の行を悉く成就し、他の諸佛國に妙音と名くる如來として、無上清淨圓滿の菩提を現かに成就せられたる覺者となるべし。八十俱胝尼由他の(有情は)、燃燈如來より忍 (*hzod-Pa*) を得て、無上清淨圓滿の菩提より退轉せず、無量光如來に由て、昔菩薩の行を行じ無上清淨圓滿の菩提を成熟し給へる(如く)、彼等も亦樂有世界に生れて本願 (*Shon-Gyi Samor*)と、行 (*Spyod-Pa*)とを悉く成滿し得べし。

(24) 其時、此三千大千世界は六種に震動し(以下原文)、又種々神變を普く現じ、又曼茶羅華は地上に咲き、殆んど沒するまで吹散せられ、天と人との諸音樂さへ好く響き、尙(色)究竟(天)處に至るまで隨喜の聲は響きたり。

(25) 世尊はこの語を斯く告げ給ひしに、彌勒大菩薩、長老阿難陀、彼の一切會衆、天と人と阿修羅と乾闥婆の世界は歡喜して、世尊の所説を現かに稱讃せり。

聖大寶積の法門百千頃中、無量光佛如來の國の功德莊嚴と名けらる。五頃は完結す。

沙門ルーアイデヤルツアン (*Nāgadhvaya<sub>3</sub>, 龍幢, kluhi Rgyal-mTsham.*) に依て譯し、併に校訂せらる。

註、本經の譯者ルーアイ、デヤルツアンは西藏チ、スロン、テウツアン王 khriston Ldehu-b-Tsam の招聘に依り、印度より來藏して譯經事業を開始し、多數の聖典を翻譯せる有名なる翻譯家なり。王は西紀七〇五年に生れ、西紀七三〇年に即位せり。即位後間もなく國家的事業として聖典翻譯事業を起せり。本經も亦その當時梵本より藏譯せらるものの一なり。尙彼と俱に來藏せし沙門イーラ、トー・Bande Te-Qes-Sde は同時代に佛說阿彌陀經を梵本より藏譯せり。

本經は甘沫爾部、大寶積經 (*Āryamahāratnakūta dharma-paryāya-cetasasahasrika-grantha ; hPhags-pa dkon-mChog bRtsegs-pa Cheri-phoi choskyi Rnam-Grans Lehu Stöñ-Phrag Rgya-pa. P. B. 270—P. A. 308*) 全五函中、第一函に收輯せらる原典に據る。譯者將來大谷大學圖書館藏。大正十一年十一月八日再訂譯

### ○西藏文大無量壽經和譯正誤表

本譯第四卷第二號に掲載せし藏文大無量壽經和譯は、誤植頗る多くして讀者の迷惑尠からず、蓋し印刷の際、校正漏に屬したるものなるべし、誠に讀者に對して申譯なき次第、茲に寛容を乞ふ、かへか。 (譯者記)

誤

#### 題 號

- |   |   |
|---|---|
| (1) Aryunitabhabhyuha-nūma-mahāyāna-sūtra.              | Āryāmitabhabhyūha-nāma-mahāyāna-sūtra.              |
| (2) Hphags-pa Hod-dPa <sub>g</sub> Med-kyi bhod-pa..... | hPhags-pa Ḥod-dPa <sub>g</sub> Med-kyi bkod-Pa..... |

...Chen-Pohi

...Chen-Pohi

(3) Ārya mahāratnakūta dhārma-paryāya-gatasa-ha-  
aha-srike-grantha ;

(4) lphags-pa dkon-moheg (blktslegs-pa chen-pohi  
chos-kyi Rnam-Graus Lehü Stoü-phrag.....

Ārya mahāratnakūta dhārma-paryāya-gatasa-ha-  
aha-srike-grantha ,  
lPhags-Pa dkon-mChog bRtseg-Pa Chen-Pohi  
Chos-kyi Rnam-Grains Lehü Stoü-Phrag.....

四11頁の四行「禪天」は補天。四六頁の終11行「出世」は出現。四七頁六行「無量」は無得。九行「安樂」の」は安樂(國)の。五三]頁の11行 Sns-Pa は Snos-Ba° 十11行の「八十」俱胝尼由他的」は「八十」百千俱胝尼由他佛の」。五四頁終11行の「完全に爲やべ」は「完全に爲し得べ」。五五頁11行の「聽め給くべ」は「聽め給く」。五七頁の七行「覺者にならべ」は覺者ぬならべ。五八頁四行の Mrn は Min 同五行の SuDrau-Pa は su-Dran-Pa° 回十一行 Pahi lGyur-Ba は Pahi lGyur-Ba° 回十一行 Sh-in は Shin° 五九頁11行 Cspyod-Pa は Spyod-Pa° 八11頁五行 chub は Chub° 回六行の GZugs は gZugs° 大11頁11行の「菩薩は法衣」は「菩薩の法衣」。同四行の「興くらねば」は「興くらるへぬ」。六四頁11行の「覺者ぬならべ」は「覺者ぬならべ」。同十一行の suSon-Ba は su-Son-Ba° 大六頁八行の「菩提を求めんに」は「菩提を如實に求めんに」。六七頁十行の「諸方に」は「諸方隅に」。同終11行の Rañ-Byuñ は Rañ-Byuñ° 六九頁11行の「少なへし」とは「少なへし」の誤植なるを訂正す。